



埼玉県のマスコット コハトン

Lib. Letter

2011 Winter [11～2月]季刊

平成23年12月20日 通巻 第26号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

マヤ文明と終末思想

－マヤ暦から世界の終末思想まで－

2012年は、マヤ文明に注目が集まる年になりそうです。古代マヤで考案された数千年周期の長期暦が2012年12月で終結を迎えることから、これを人類の滅亡ととらえる映画『2012』等がヒットしました。オカルティズム関連の出版業界では、「2012年に何か起きる！」というテーマがブームといってよい程の活況を呈しています。

ですが、「マヤ暦の終結」を話題にする以前の問題として、そもそもマヤ文明とはどんな文明で、長期暦とはいったいどのようなものだったのでしょうか？日本では、南米の古代文明についてはまだまだ「謎と神秘に満ちたもの」といった程度のとらえ方が多く、あまり詳しく知られているとは言えないのが実情です。

そこで今回は、マヤ暦で注目を集めた古代マヤ文明についてと、マヤ暦が話題を集めた理由の一つである「終末思想」について、基本的な資料を集めてみました。



■「古代マヤ文明」とは？

マヤは、紀元前1800～紀元後1550年ごろにかけて、中米のユカタン半島（現在のメキシコ最南部からグアテマラ・ベリーズのあたり）一帯を中心に栄えた文明で、その担い手は古くにユーラシア大陸から渡ってきたモンゴロイドの子孫だと言われています。16世紀にスペインの侵略を受けて滅びるまで、各地に都市を築き、ピラミッド神殿や天文台、独特の文字を刻んだ石碑等を建てて暮らしていました。

マヤ文明は基本的に都市国家の集まりで、「マヤ」という大きな国家が存在していたわけではありません。力のある都市同士では勢力争いによる抗争などもあったようですが、その一方、都市間の交易も盛んに行われるなど、文化的にも進んだ文明だったと考えられています。

なお、日本では中南米の古代文明をまとめて「マヤ・インカ文明」と呼ぶことも多いのですが、実際には両者は地域的に離れているのみならず、歴史・文化・民族においてもかなりの違いがあります。マヤ文明は、マヤに先立つオルメカ文明や、マヤ後期に栄えたアステカ文明等を含めて中米を表わす「メソアメリカ文明」の中核を担っており、一方のインカ文明は、南米アンデス地方を中心とした「アンデス文明」の最後期に発展した、インカ帝国を中心とする文明です。ともに謎の多い文明であることや、中南米に馴染みが薄いことなどから混同されがちなものですが、実際にはそれぞれが一大文明といってよいほどの独自性を持っていたのです。

ただ、マヤは、現在でも研究解明が進められている文明です。20世紀後半からは特に研究・発掘調査等が進み、さまざまな発見がなされていますが、それでもまだわかっていないことは少なくありません。マヤについて調べる際には、原典やその翻訳（神話・事物記など）を見たい場合を除き、できるだけ新しい出版年の資料を読むことをお勧めします。

「世界四大文明」とアメリカ古代文明

文明の曙として紹介されることが多い世界四大文明（エジプト・メソポタミア・インダス・黄河）は、いずれもユーラシア大陸とその周辺での文明ですが、実際にはアメリカ大陸においても古代文明は勃興していました。それが、中米のマヤ・アステカであり、南米のアンデス・インカだったのです。

中南米の文明は、大河付近の農耕、金属器の使用、車輪の活用などの特徴を持たないため、四大文明と比べてあまり進んだものとは見られていませんでした。しかし、実際には発展の方向性が違うだけで、非常に高度な文明を築いていたことが最近では認識されつつあります。

たとえば、車輪についてですが、古代マヤの人々は車輪という概念をすでに知っていたことが出土品から明らかになっています。マヤで車輪が採用されなかったのは、車を牽くための大型の家畜がいなかったこと、道路の高低差が激しく車の運用に向かなかったことなどが理由として考えられています。

また、金属器は使っていませんでしたが、マヤの人々の文化は極めて高度な石器文明によって立派に成立していました。ガラス質の特性を持つ黒曜石を用いることで、金属器に負けない切れ味の刃物を作ることも可能だったと言われています。

■「マヤ暦」とマヤの文化

今回、マヤが注目を集めたのは、「マヤ暦」と呼ばれる独特の暦のうち、数千年単位の暦である「長期暦」がちょうど2012年末で終結することからでした。

●マヤと科学

マヤの人々は、特に天文学や数学に関して、驚くべき知識を持っていました。例えば、数学的な「0（ゼロ）」の概念はインドで生まれたというのが一般的ですが、実はインドとはまったく独立した形で、マヤにおいても「0（ゼロ）」の概念は生まれていたのです。マヤの人々は20進数を基本としていたとされますが、この数字を表す文字の中に、0を示す記号（貝を表わすイメージとされています）が入っています。



また、そうした数学的知識にも関連しますが、マヤの天文学の正確さは現代においても驚異です。現代の測定での1年の日数は365.24219日ですが、実はマヤの人々はこれとほぼ近似の値（365.2420日）をはじき出していました。ただ、不思議なことに、マヤの暦の中で、現代のわれわれの採っている「うるう年」のような微調整は行われていなかったようです。

さらに、マヤの人々は月の運行についても詳しく、惑星、特に金星の運行に大きな興味を払っていたと思われます。金星はマヤの人々にとって戦争と関わりが深く、攻撃開始日を設定する場合などに活用されていたと考えられています。

●信仰と迷信のマヤ

すぐれた科学的知識を持つ一方で、迷信深く信心深いマヤの側面も無視するわけにはいきません。古代マヤの都市国家においては、創造主に対する畏敬の念、あるいは農業国であることから雨乞いの要請などがあり、そうした際に生贄が捧げられることがあったことがわかっています。

そうした中で特徴的なのが、おそらくは神事としておこなわれたであろう球技（ポク・タ・ポク）です。ゴム製のボールを使ったこの球技では、競技の勝者がご褒美として首を刎ねられた（!）という奇妙な説が伝えられています※。これは、当時の人々にとって神への生贄になることが名誉だ

ったからということですが、現代の考え方からすると、ちょっと理解しがたいものがありますね。
※実は、この説には異論もあり、敗者が首を刎ねられた説、勝者は首を刎ねられ飾られたが敗者は殺されるだけで放置された説など、いろいろな説が飛び交っています。実際のところは…どうなのでしょう？

生贄の泉：チチェン・イツアの「セノーテ」

マヤの都市国家では、大河の代わりにセノーテ（石灰岩が露出した天然の泉・井戸）がよく活用されていました。こうしたセノーテの中には宗教的儀礼に活用されたものもあり、有名なのがチチェン・イツアにある「聖なるセノーテ」と呼ばれる泉です。これは別名「生贄の泉」とも呼ばれ、供物の他に雨と雷の神チャクモールへの生贄が投げ込まれたことで知られています。

ただ、伝説にある内容とは違い、生贄にされていたのは「乙女」ばかりではなく、男性や子供の方が多かったことが、引き揚げられた人骨からわかっています。また、生贄自体がそれほど頻繁に行われたものではなく、宗教儀礼では主に供物が投げ込まれたと今では考えられています。

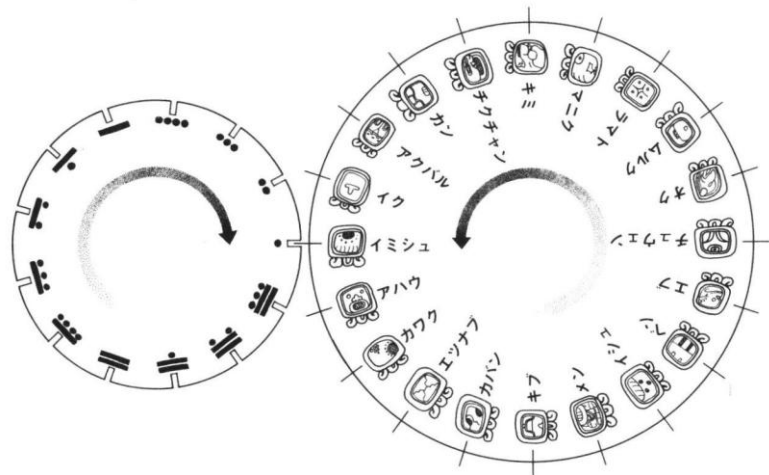
マヤの人々の信心深さは、マヤ暦の表記（暦で使われている記号は、動物や神様などを表わしているとされています。）にも垣間見え、いわば「マヤ暦」は、マヤの人々の科学と信仰の集合体ということになるのでしょうか。

●マヤ暦：ツオルキン・ハアブ・長期暦

マヤで使われていた暦は何種類もありますが、特に注目される暦は3種類あり、それぞれが独立したものでありながら、相互に関連付けられる特徴を持っています。3つとも周期が異なるので、それらを組み合わせることで、厳密な日付を特定することができるのです。

<ツオルキン>

まず、260日で一巡する「ツオルキン」という暦があります。これは、1から13までの数と、独自の名前を持った20の日を組み合わせたもので、全部で $13 \times 20 = 260$ 日の違った組み合わせを表現することができます。少し変則的なパターンですが、「1ヶ月13日で、曜日が20種類あるカレンダー」とでもイメージすると、わかりやすいかも知れません。



ツオルキンがどのような理由で作られ、どう活用されていたのかは、実はまだよくわかっていません。ただ、下記のハアブと組み合わせた「カレンダー・ラウンド」と呼ばれる仕組みによって、より厳密にある出来事の起きた日付を特定することができたと考えられています。

<ハアブ>

我々が今使っている暦とほぼ同じ、365日で一巡する暦が「ハアブ」と呼ばれるものです。これは、1ヶ月を20日とし、独自の名前を持った18の月と組み合わせたものですが、年の最後には5日間だけの19ヶ月目がやってきます。これは「ワイェブ」と呼ばれ、不吉な日であるとされ

ていました。なお、各月に「20日目」という概念はなく、次の月への「着座」という考え方がとられていました。また、なぜか「うるう年」のような端数調整は行われませんでした。

	1月：ポップ 1～19日+ウォへの移行日		11月：サク 1～19日+ケフへの移行日
	2月：ウォ 1～19日+シプへの移行日		12月：ケフ 1～19日+マクへの移行日
	3月：シプ 1～19日+ソツツへの移行日		13月：マク 1～19日+カンキンへの移行日
	4月：ソツツ 1～19日+セクへの移行日		14月：カンキン 1～19日+ムワンへの移行日
	5月：セク 1～19日+シュルへの移行日		15月：ムワン 1～19日+パシュへの移行日
	6月：シュル 1～19日+ヤシュキンへの移行日		16月：パシュ 1～19日+カヤブへの移行日
	7月：ヤシュキン 1～19日+モルへの移行日		17月：カヤブ 1～19日+クムクへの移行日
	8月：モル 1～19日+チェンへの移行日		18月：クムク 1～19日+ワイェブへの移行日
	9月：チェン 1～19日+ヤシュへの移行日		
	10月：ヤシュ 1～19日+サクへの移行日		19月（不吉な5日間）：ワイェブ 1～4日+ポップへの移行日

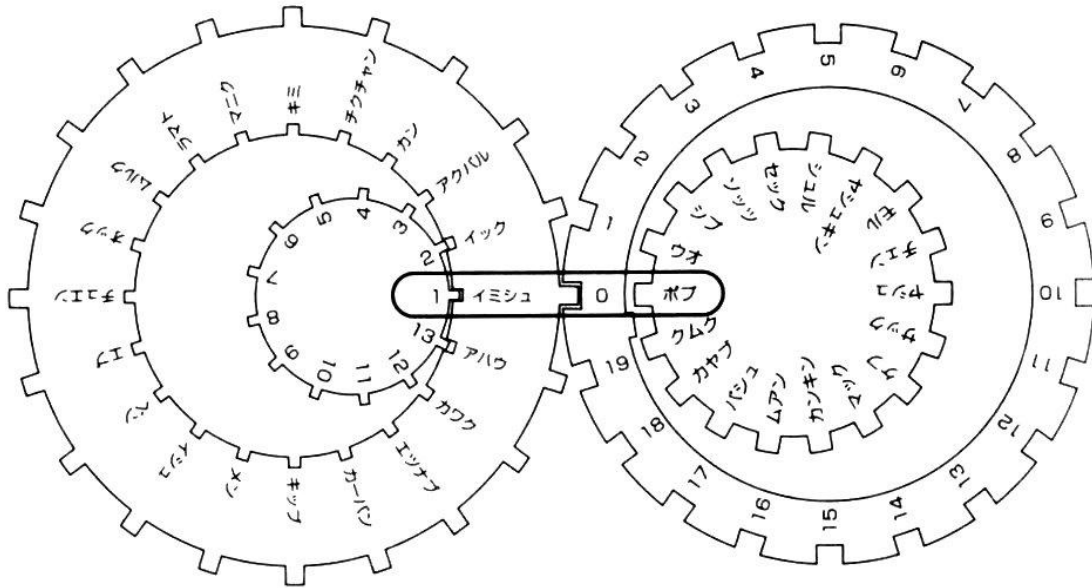
<カレンダー・ラウンド>

ツォルキンとハアブを組み合わせて使われる方法が、「カレンダー・ラウンド」と呼ばれるものです。これは二つの暦をつなげて読む形をとっており、例えば次ページの図の例では、この日は「1イミシュ0ポップ」（厳密には「1イミシュポップ着座」というべきでしょうか）という日になり、この日と同じ「1イミシュ0ポップ」がもう一度回ってくるのは18,980日後、つまり約52年後となります。日本で使われる「十干十二支」で「丙午（ひのえうま）」の年（60年に1回）が回ってくる考え方と似ているかもしれませんね。

カレンダー・ラウンドは、マヤも含めたメソアメリカ文明全般で広く利用されていたことが知られており、その起源はかなり古いと思われます。今でも、メキシコ南部やマヤ高地に残る先住民の中には、暦を司る神官の下でこのカレンダー・ラウンドを使い続けている人がいます。

ツオルキン (260 日暦)

ハアブ (365 日暦)



カレンダー・ラウンドは、確かに日付を特定するためにかなり有効ですが、周期の52年を超えた長期間にわたる出来事を正確に記録することはできません。(18,980日後には、「まったく同じ日」が来てしまいますから。) マヤのような息の長い文明では、もっと長いスパンでの記録をとるための仕組みが必要でした。それが3つめの暦「長期暦」です。

<長期暦>

カレンダー・ラウンドでも表現しきれない長い期間における記録をとるために使われたのが、「長期暦」です。これは5つの位(桁)からなっており、長期暦を示す記号につなげて5桁の数字を並べることで表現されます。便宜的には「a. b. c. d. e」というように各桁の数字をピリオドで区切って表示されます。



「長期暦」であることを示す記号です。この下に並ぶ数字と(桁を表す)記号で、具体的な長期暦の日付を示します。



「バクトウン」の位を表します。1バクトウン=20カトウン=144,000日(約394.26年)にあたります。



「カトウン」の位を表します。1カトウン=20トゥン=7,200日(約19.71年)にあたります。



「トゥン」の位を表します。1トゥン=18ウイナル=360日(約0.99年)にあたります。



「ウイナル」の位を表します。1ウイナル=20キン=20日にあたります。



「キン」の位を表します。1キン=1日です。

(ここでは「5. 4. 3. 2. 1」という日付を例にしてみました。)

※1年=365.242日として換算しています。

この場合、読みは「5バクトウン4カトウン3トゥン2ウイナル1キン」となります。「バクトウン」や「カトウン」とは、われわれの数字で言う「億」とか「万」のような桁の名前だと考えるとわかりやすいかも知れません。ちなみにこの日は、長期暦の始まりの日から

$5 \times 144,000 + 4 \times 7,200 + 3 \times 360 + 2 \times 20 + 1 \times 1 = 749,921$ 日後

をあらわしますので、約2,053年後（だいたい紀元前1091年ごろ）のある日付を示していることになります。

長期暦の始まりは「13.0.0.0」「4アハウ8クムク」の日とされており、西暦では**紀元前3144年8月13日（11日とも）**にあたとされます。これは前回の長期暦の終了日でもあります。長期暦は一番上位の桁の「バクトゥン」が13になった時に終わるので、今回の長期暦の終期日は「13.0.0.0」「4アハウ3カンキン」となり、起点の日から1,872,000日後、西暦で数えて約5,125年後の**2012年12月23日（21日とも）**にあたります。

上記の仕組みをみればわかるように、マヤで使われている暦は実際には循環暦と呼ばれるもので、われわれのカレンダーと同じように、暦の終わりからはまた新たな暦が始まるものとされています。つまり、マヤの長期暦の終わりもまた、数千年単位のカレンダーのとてつもなく大きい「大晦日」であるということができるかも知れません。

現代のような観測機器が存在したわけでもなく、望遠鏡などももちろんなかった時代に、驚くほどに現代と寸分違わない天文データを得ていたマヤの人々。そんな不思議な技術を持つマヤで、謎の知識の集大成として作られていた暦が終結するという事実から、「マヤの人々がわざわざ終わりを設定したのだから何か起きるに違いない」という疑念が生じたのが、今回の「マヤ終末予言」説の発端と言えるのではないのでしょうか。



「上」には「上」がある？

実は、長期暦の最高桁バクトゥンを超える暦日の単位も、マヤでは確認されています。

1ピクトゥン = 20バクトゥン = 2,880,000日

1カラブトゥン = 20ピクトゥン = 57,600,000日

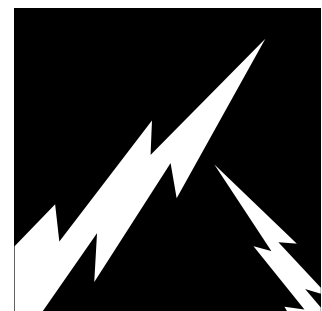
1キンチルトゥン = 20カラブトゥン = 1,152,000,000日

1アラウトゥン = 20キンチルトゥン = 23,040,000,000日

ちなみに、1アラウトゥンは、約63,081,429.5年。ここまで大きくなると、「いったい何に使うんだ」という世界ですね。

■「終末思想」：終わりの連想

すべての動物は本能的に死を恐れますが、人間はそれだけにとどまらず、社会全体が自分も含めて滅びていくことに恐怖感を感じるようです。「今生きている世界がいつか終わってしまうかも知れない…」。そんな恐怖からか、実際の終末は一体いつ、どのように訪れるのか、その具体的内容を思い描き記されたのが、いわゆる終末思想（終末論）です。終末論は、「歴史には必ず終りがある」という思想で、多くの場合、宗教と結びついて考えられます。宗教的な退廃が強まるほど終末に近づくという観点に立っており、終末思想を伝える宗教によりその時期や内容はさまざまです。代表的なものとしては、キリスト教の黙示録や仏教の末法思想などがあげられるでしょう。



マヤ文明の場合、これまで世界は4度の滅亡を経験しているという神話伝説が伝えられており、長期暦が示す最終日がマヤの時間単位でいう「第5回目の世界」の終わりを示すことから、過去4回の世界が滅んだようにこの世界も滅ぶのではないかという終末思想に結びついたものと思われます。

ここでは、そうした終末思想に関する資料と、終末思想を持つ世界の宗教がそれぞれ「終末」をどのように伝えているか、そして、終末思想とその伝播には欠くことのできない「予言」に関して記された資料を集めてみました。

■ 宗教から生まれた「終末思想」

●ゾロアスター教：世界最古の二元論

ゾロアスター教は、今のイランのあたりで、紀元前7世紀ごろに生まれた宗教と言われています。教祖はザラスシュトラ（英語名でゾロアスター）で、日本名では拝火教と称されることもあります。

ゾロアスター教では、世界はスプンタ・マンユ（しばしば「アフラ・マズダー」と同一視されます）とアンラ・マンユ（ペルシャ語では「アーリマン」）の2つの霊の出会いから生まれたとされます。この2つの霊は自らの意思で善・悪のどちらに属するかを決め、スプンタ・マンユが善と光の霊、アンラ・マンユが悪と闇の霊となりました。この2つの霊によって世界の創造と破壊が起きるのですが、その世界に生まれた人間もまた、自らの意思で善悪どちらの立場に立つのか決めるのだと言います。



ゾロアスター教では、ゾロアスターの誕生から3,000年後に世界の終末が来るとしています。この3,000年は3等分され、1,000年ごとにゾロアスターの子孫の救世者サオシュヤントが現れます。そして、最後のサオシュヤントが終末の大審判を行い、悪を無力化します。この時、自らの意思で善悪に分かれた人間もまた、審判を受けるとされています。

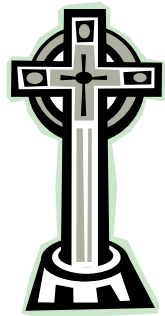
ゾロアスター教では善と悪が同時に発生したと定義するため、ユダヤ教やキリスト教などの一神教とは相容れない考え方だったのですが、この善と悪の最終戦争という発想は後の宗教にとっても非常に魅力的なものだったようで、結果的にこの善悪二元論・最終戦争・メシア思想等は東西のさまざまな宗教に影響を及ぼすことになったと考えられています。

●ユダヤ教とキリスト教：終末観の変化と「ハルマゲドン」「ミレニアム」

ユダヤ教徒にとっての初期の終末思想は、（神の罰により）長く流浪の民と化していたユダヤ民族がその辛い生活の「終末」を迎え、エルサレムに帰還するという発想にあったようです。紀元前4～3世紀に著された『イザヤ書』『ヨエル書』『ゼカリヤ書』などにおいては、世界を支配する他民族の滅亡とユダヤ人のエルサレムへの集結、そして新たな宇宙の創造が記されています。

さらに後期になると、ユダヤ教においても善悪二元論が見られるようになります。『エゼキエル書』『ダニエル書』『エノク書』『マカビー第二書』などでは、世界の終末における悪魔の支配から、神とメシアによる最後の審判について記されています。この発想は、後にキリスト教へも受け継がれることになります。

一方、キリスト教の終末論としては、神と悪魔の最終闘争としての「ハルマゲドン」があまりにも有名ですが、実はキリスト教の経典やイエス自身からは、この世界の終末が一体いつのことになるのかについて、明確な指摘はなされていません。「天地は滅びるであろう。（中略）その日、その時はだれも知らない。天にいる御使いたちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる。」（『マルコによる福音書』）というのが基本的な考え方です。



ただ、その一方でキリスト教にはミレニアム（millenium）信仰と呼ばれる概念があります。有名な『ヨハネの黙示録』によれば、イエス・キリストが地上に再臨して「千年王国」を支配し、さらにはその末期には千年間封印されていたサタンが解放されるが、ハルマゲドンによって敗れ去るとされています。この「千年王国」がいつ来るか（あるいはもう来ているか）の解釈によって、滅亡までの期間に関して諸説が生まれました。また、西暦がイエスの生誕と関連することから、西暦2000年にはこの年をミレニアム思想と結びつけた終末論が多く論じられました。

●仏教：末法思想

仏教で言う「末法思想」は、一般的な「終末思想」とは少し違って、仏法の普及から見た歴史観のことを言います。釈迦（仏陀）の死を契機として「正像末（しょうぞうまつ）」の3期を経

て、仏法が衰退していくというもので、それぞれの期間は以下のように説かれています。

正法：釈迦入滅後500年（1000年とも）のことを指し、この時期には仏教の教え・実践・悟りが確実に行われるとされます。

像法：正法の後1,000年（500年とも）のことを指し、この頃には悟りを得る者はいませんが、教えと実践は正法と同じく行われるとされます。

末法：像法の後10,000年（無限（！）説も）のことを指し、この頃には仏教の教えのみが残り、実践する者や悟る者はいなくなるとされます。

なお、この3つの時代の後に「**法滅**（経道滅尽とも）」という時期が訪れ、仏法は滅ぶとされています。（なお、法滅後100年間だけ、浄土経典がこの世にとどまるが、その後は失われるとも言われています。）

これだけでは仏教には他の終末思想と比べて未来がなさそうですが、実はきちんと救いも用意されています。



釈迦入滅後**56億7千万年後（！）**になると現世に弥勒菩薩が生まれ、龍華樹の下で悟りを開いて、未だ救済されていなかった仏弟子をことごとく救うという「弥勒信仰」です。弥勒は釈迦の後を補う仏になるので「補処（ふしょ）の菩薩」とも呼ばれます。

仏教の終末観では、絶滅についての記述はなく、はるか未来での救いが準備されているので、少なくともこの時期まで人類は滅びていません。このような特徴から、他の終末思想とは一味違うものと言えます。

■「終末思想」と予言

少し乱暴な言い方になりますが、終末思想には「予言（預言）」がつきものです。これは考えてみれば自然なことで、「終末が来る」とわかっているのならば、当然「いつ、どのような終末が来るのか」という疑問への答えが求められるからです。それに応えるべく、さまざまな宗教者・思想家によって、終末思想を示す予言が説かれてきました。

しかし、こうした予言が実現するのかどうかは、本当はわかりません。今回ご紹介している資料の中にも数多くの予言に関する資料がありますが、その中には、的中しなかった予言も山ほどあります。つまるところ「信じるか信じないかは、あなた次第」なのです。

ただ、もし「信じる」ことにするのならば、一つだけ注意すべき点があります。終末思想は、しばしば破壊的「カルト」団体に利用されることがあります。

カルト団体が終末思想を利用するのは、恐怖心をあおって信者をコントロールするのに非常に有効だからです。しかし、こうした形の洗脳は、往々にして悲劇的な結果をもたらします。教祖が掲げた終末予言を信じた集団自殺や、オウム真理教に代表されるような「ハルマゲドン」を口実にしたテロ行為など、「予言を信じる」のではなく、「予言を的中させる」ためのパニック的な行動に出てしまう例が少なからず存在します。

終末思想を唱える予言が当たろうが当たらないが、この世界を生きる我々が毎日を一所懸命暮らしていくことに変わりはありません。

「たとえ明日世界が滅びようとも、私は今日、林檎の木を植えよう。」

マルティン・ルター之言と伝えられるこの言葉こそが、終末思想に臨む姿としては一番適切なものかもしれません。



県立熊谷図書館にある今回の展示資料



～マヤ文明と終末思想～



※(図書の場合)『書名(：副書名、巻号)』著者名 出版者 出版年【県立図書館の請求記号】

※(雑誌の場合)著者名「雑誌記事名」『雑誌名』巻号 出版者 出版年

※以下に掲載した資料は、県立熊谷図書館2階ロビーで2月23日まで展示中です。

*印の資料は、館内利用のみとなります。(館外貸出はできません。)

■「古代マヤ文明」とは？

(図書)

- ・『マヤとアステカ(現代教養文庫)』吉野三郎 社会思想社 1963.9【B256.03/マヤ/】
- ・『マヤ』マイケル・D. コウ 学生社 1975【256/マ/】
- ・『マヤ・アステカの旅(並河万里遺跡をゆく2)』並河万里／〔ほか〕 学習研究社 1977【295/N47/】
- ・『マヤ：失われた文明の謎と再発見』チャールズ・ガレンカンブ 佑学社 1977.2【256/マ/】
- ・『マヤ文字の秘密』V. クジミシチェフ 大陸書房 1978.7【256/マ/】
- ・『マヤとアステカ：中米古文化物語(現代教養文庫)』吉野三郎 社会思想社 1979【B256/マ/】
- ・『マヤとアステカ(世界史研究双書)』狩野千秋 近藤出版社 1983.7【256/マ/】
- ・『マヤ：古代から現代へ(岩波グラフィックス)』落合一泰 岩波書店 1984.11【256/マ/】
- ・『マヤ文明：征服と探検の歴史(教養選書)』
デイヴィッド・アダムソン 法政大学出版局 1987.11【256/マ/】
- ・『マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか?』八杉佳穂 福武書店 1990.8【256/マ/】
- ・『NHK大英博物館 6 マヤとアステカ・太陽帝国の興亡』
NHK取材班／責任編集 日本放送出版協会 1991.3【069.6/マ/】
- ・『マヤ神秘を開く旅(海外旅行選書)』ピーター・キャンビー 図書出版社 1993.9【295.7/マ/】
- ・『マヤ・アステカ太陽の文明(吉村作治の文明探検3)』吉村作治 平凡社 1998.7【BM256/マヤ/】
- ・『ヴィジュアル百科世界の文明：石器時代から産業革命まで』
ミック・アストン 原書房 1999.10【D209/マ/】
- ・『マヤ終焉：メソアメリカを歩く』土方美雄 新評論 1999.12【256.03/マヤ/】
- ・『マヤ学を学ぶ人のために』八杉佳穂／編 世界思想社 2004.10【256.03/マヤ/】
- ・『マヤ文明：失われた都市を求めて(「知の再発見」双書)』
クロード・ボーデ 創元社 1991.2【256/マ/】
- ・『マヤ文明(中公新書)』石田英一郎 中央公論社 1967.3【256/マ/】
- ・『マヤ文明(文庫クセジュ)』ポール・ジャンドロ 白水社 1981.9【256/G34/】
- ・『マヤ文明』デイヴィッド・アダムソン 文化放送開発センター出版部 1979.5【256/マ/】
- ・『マヤ文明の謎(ドキュメントシリーズ3)』日本テレビ放送網 1978.7【256/マ/】

- ・『マヤ文明の謎（講談社現代新書）』青木晴夫 講談社 1984.12 【256/マ/】
- ・『マヤ文明の旅：謎の消滅から現在まで（世界紀行冒険選書）』
ロナルド・ライト 心交社 1991.12 【295.6/マ/】
- ・『マヤ文明はなぜ滅んだか？：よみがえる古代都市興亡の歴史』
中村誠一 ニュートンプレス 1999.1 【256.03/マ/】
- ・『マヤ文明を掘る：コパン王国の物語（NHKブックス）』
中村誠一 日本放送出版協会 2007.6 【256.03/マ/】
- ・『メキシコ／マヤ&アステカ（写真でわかる謎への旅）』
辻丸純一／構成・写真 雷鳥社 2001.8 【256.03/マ/】
- ・『メソアメリカの考古学（世界の考古学2）』青山和夫 同成社 1997.10 【256/ミ/】
- ・『幻のマヤ文明：メキシコの遺跡と文化遺産』並河万里／写真 形象社 1972 【D256/マ/】
- ・『古代マヤ王歴代誌』サイモン・マーティン 創元社 2002.3 【256.03/コタ/】
- ・『古代マヤ石器の都市文明（学術選書）』青山和夫 京都大学学術出版会 2005.12 【256.03/コタ/】
- ・『古代マヤ文明』マイケル・D. コウ 創元社 2003.4 【256.03/コタ/】
- ・『古代メソアメリカ文明：マヤ・テオティワカン・アステカ（講談社選書メチエ）』
青山和夫 講談社 2007.8 【256.03/コタ/】
- ・『古代文明の謎はどこまで解けたか 1 失われた世界と驚異の建築物・篇（Skeptic library 07）』
ピーター・ジェイムズ 太田出版 2002.7 【209.3/コタ/】
- ・『最後のマヤ民族（新潮選書）』若林美智子 新潮社 1980.9 【295.6/サ/】
- ・『失われたマヤ王国』カーネギー研究所／〔著〕大陸書房 1979.7 【256/Ka52/】
- ・『新しい考古学と古代マヤ文明』ジェレミー・A. サブロフ／〔著〕新評論 1998.11 【256.03/アタ/】
- ・『図説古代マヤ文明（ふくろうの本）』寺崎秀一郎 河出書房新社 1999.5 【256.03/ス/】
- ・『世界の古代文明（図説世界文化地理大百科 別巻）』
ポール・G. バーン／編 朝倉書店 2004.12 【D209.3/セ/】
- ・『世界の聖域 17 マヤの聖壇』講談社出版研究所／編 講談社 1981.7 【D160.8/セ/】
- ・『世界の大遺跡 13 マヤとインカ』講談社 1987.11 【BM256//】
- ・『世界の文化史蹟 9 マヤの神殿』講談社 1968 【D209/セ/】
- ・『世界の歴史大図鑑』アダム・ハート＝デイヴィス／総監修 河出書房新社 2009.5 【D203.6/セ/】
- ・『世界最後の謎：失われた文明を求めて』日本リーダーズダイジェスト社 1978.12 【D209.3/セ/】
- ・『世界最大の謎：失われた文明の謎に挑む』
フィリップ・ウィルキンソン／ロバート・イングペン 教育社 1992.1 【D202.5/セ/】
- ・『謎の古代遺跡（ニュートンムック）』
フィリップ・ウィルキンソン／ロバート・イングペン 教育社 1995.11 【D202.5/ナ/】
- ・『秘密の王国マヤのなぞ（少年少女世界のノンフィクション）』
白木茂／編著 偕成社 1983.2 【児童08/シ/】
- ・『緑の迷宮：マヤ文明・ユカタン半島幻想紀行（ネイチャリングスペシャル）』
夢枕獏 全国朝日放送 1991.11 【BM295/ミ/】
- ・『アメリカ大陸の古代文明（文庫クセジュ）』アンリ・レーマン 白水社 1959.3 【250/アメ/】
- ・『アメリカの先史文化』ベティ・メガーズ 学生社 1977.7 【250/メ/】
- ・『紀元前のアメリカ』バリー・フェル 草思社 1981.4 【250/フ/】
- ・『古代アメリカ文明の謎』ナイジェル・デーヴィス 佑学社 1980.5 【250/コ/】
- ・『太陽と月の神殿：古代アメリカ文明の発見（中公文庫）』増田義郎 中央公論社 1990.6 【B255/タ/】

- ・『古代アメリカ文明：アステカ・マヤ・インカ（世界歴史の旅）』
増田義郎／青山和夫 山川出版社 2010.2 【295.5/コタ/】

(雑誌)

- ・「よみがえる王たちの物語 古代マヤの扉をひらく」『藝術新潮』54(3) 新潮社 20030301
- ・『National geographic』1(2) 日経ナショナルジオグラフィック社 19950515
- ・『National geographic』3(12) 日経ナショナルジオグラフィック社 19971215
- ・『National geographic』8(4) 日経ナショナルジオグラフィック社 20020401
- ・『National geographic』9(8) 日経ナショナルジオグラフィック社 20030801
- ・『National geographic』9(12) 日経ナショナルジオグラフィック社 20031201
- ・『National geographic』10(5) 日経ナショナルジオグラフィック社 20040501
- ・「新説マヤ文明」『National geographic』13(8) 日経ナショナルジオグラフィック社 20070801
- ・竹内均「マヤ文明：密林に飲みこまれた古代都市」『Newton』22(5) ニュートンプレス 20020507
- ・青山和夫「マヤ文明における太陽と暦」『科学』79(12)(通巻928) 岩波書店 20091201
- ・〈Maya Mysteries〉『National geographic』212(2) National Geographic Society, 2007.8 【洋雑誌】

■マヤ暦とマヤの文化

(図書)

- ・『アステカ・マヤの神話（丸善ブックス）』カール・タウベ 丸善 1996.3 【162.5/ア/】
- ・『ポ波尔・ヴフ：マヤ文明の古代文書』
A. レシーノス／原訳・校注 林屋永吉／訳 中央公論社 1976 【256/ボ°/】
- ・『ポ波尔・ヴフ（中公文庫）』A. レシーノス／原訳 中央公論社 1977.10 【B256/P81/】
- ・『マヤ神話：チラム・バラムの予言』ル・クレジオ／原訳 新潮社 1981.9 【162.5/マ/】
- ・『マヤ・アステカの神話』アイリーン・ニコルソン 青土社 1992.12 【162.5/マ/】
- ・『マヤ文明新たな真実：解読された古代神話『ポップ・ヴフ』』
実松克義 講談社 2003.1 【256.03/マ/】
- ・『ヌエバ・エスパニャ報告書（大航海時代叢書 第2期13）』
ソリタ／〔著〕 岩波書店 1982.7 【298/タ°/】 ※「ユカタン事物記」所収
- ・『マヤ文明の興亡』J. エリック・S. トンプソン 新評論 2008.12 【256.03/マ/】
- ・『マヤ文明の神秘：惑星Xの謎』エリック・ウムランド 佑学社 1975.4 【256/ウ/】
- ・『マヤ文明の謎』武田修 大陸書房 1980.4 【256/マ/】
- ・『マヤ文明聖なる時間の書：現代マヤ・シャーマンとの対話』
実松克義 現代書林 2000.4 【163.9/マ/】
- ・『失なわれた文明：メキシコ・マヤ写真集』持田信夫 講談社 1968 【256/モ/】
- ・『図説マヤ・アステカ神話宗教事典』メアリ・ミラー／編 東洋書林 2000.9 【R164.56/セ/】
- ・『世界の民衆宗教』荒木美智雄／編著 ミネルヴァ書房 2004.1 【160.4/セ/】
- ・『世界予言全書』トニー・アラン 原書房 2011.10 【147.4/セ/】
- ・『謎のクリスタル・スカル：地球ガイアから宇宙へ』

クリス・モートン 徳間書店 1998.11 【256.03/ナ/】

(雑誌)

- ・「幻想世界の神々イラスト大事典」『別冊宝島』1600 宝島社 20090321
- ・「世界 謎の超古代史」『歴史読本／別冊』17(12)(通巻170) 新人物往来社 19920609
- ・「世界 謎の古代文明」『歴史読本／別冊』17(21)(通巻179) 新人物往来社 19920906
- ・「(特集) 2012年「地球脱出計画」」『ムー』22(7)(通巻236) 学習研究社 20000701
- ・「(特集) 2012年12月23日マヤ文明の再臨」『ムー』23(2)(通巻243) 学習研究社 20010201

- ・「(特集) 神秘の「クリスタル・スカル」」『ムー』30(7)(通巻332) 学習研究社 20080701

■終末思想と終末予言

(図書)

- ・『ゾロアスター研究』伊藤義教 岩波書店 1979.4【168/ゾ/】
- ・『ミトラ神学』東条真人 国書刊行会 1996.5【168/ミ/】
- ・『ユダヤ教史(世界宗教史叢書)』石田友雄 山川出版社 1980.3【199/ユ/】
- ・『再生する終末思想(シリーズ歴史学の現在5)』歴史学研究会／編 青木書店 2000.11【161.2/サイ/】
- ・『終末思想に夢中人たち』ダミアン・トンプソン 翔泳社 1999.7【191.6/シユ/】
- ・『終末論の正体：人は何によって救われるのか』小坂井澄 文藝春秋 1996.3【191.6/シ/】
- ・『世界の終焉：今ここにいることの論理』ジョン・レスリー 青土社 1998.6【191.6/セ/】
- ・『世界の神話伝説総解説』自由国民社 1987.4【R164/セ/】
- ・『聖書と終末論』小川国夫 小沢書店 1998.9【191.6/セイ/】
- ・『平安仏教と末法思想』速水侑 吉川弘文館 2006.10【182.1/ヘ/】
- ・『北欧神話の世界：神々の死と復活』アクセル・オルリック 青土社 2003.11【164.389/ホ/】
- ・『末法と末世の思想』小沢富夫 1974【180.2/オ/】
- ・『未来の歴史：古代の預言から未来研究まで』ジョルジュ・ミノワ 筑摩書房 2000.12【147.4/ミラ/】
- ・『予言がはずれるとき』L. フェスティンガー／〔ほか〕 勁草書房 1995.12【147.4/ヨ/】
- ・『予言の心理学：世紀末を科学する』菊池聡 ベストセラーズ 1998.8【147.4/ヨ/】

(雑誌)

- ・「特別増刊 預言されたハルマゲドン」『歴史読本／別冊』20(28) 新人物往来社 19950713
- ・「(特集) 終末観と社会運動」『歴史学研究』724 青木書店 19990615
- ・「ノストラダムスと2000年問題」『S a p i o』11(5)(通巻224) 小学館 19990324
- ・「世界の宗教、カルト、予言者別「世界の終末」早わかりカレンダー」
『S p a !』48(30)(通巻2653) 扶桑社 19990804
- ・「(特集) 釈迦の大予言」『ムー』20(5)(通巻210) 学習研究社 19980501
- ・「特集 終末論」『ユリイカ』31(2)(通巻414) 青土社 19990201
- ・ミゲル・アスイン＝パラシオス「『神曲』におけるイスラーム終末論(抄)」『幻想文学』65 20021110

※上記以外にも、県立図書館ではマヤ文明や終末思想に関する資料を所蔵しております。
お探しの資料がございましたら、お気軽にお問い合わせください。



※今号で掲載した図面は、

- ・『古代マヤ文明』マイケル・D. コウ／著 創元社 2003.4【256.03/コタ/】
- ・『古代メソアメリカ文明(講談社選書メチエ)』青山和夫／著 講談社 2007.8【256.03/コタ/】
- ・『マヤ文明のミステリーが面白いほどわかる本』ボックス・ストーリー 中経出版 2010.9【県立図書館未所蔵】

に掲載のものを参考にしました。